クリケットと映画
―インドの二大娯楽―

佐藤　創

ニューデリー駐在中に雇っていた運転手は、日系企業の社長付きの運転手を長年勤めた後に私のところにきていたためか、申し分のない働きぶりであった。無遅刻無欠勤（日本では当たり前だがインドでは必ずしもそうではない）、運転も安全第一で無理なことはせず（道はカオスであり我先に行かねば前に進めないと思っているドライバーが大半である）、クラクションも（インド人にしては）鳴らす回数は控えめだった。私が車に向かうと遠くからでも目ざとくみつけ、私が座るべき後部座席のドアを開けてくれる毎日であった。

そんな彼が一度だけ私が車に近づいたことに気がつかなかったことがある。ある日の夕方、仕事を終えて帰ろうと車にたどり着くと、我が運転手は運転席に座り込んだまま、なにやら手で目を覆って天を仰いでいる様子である。自分でドアを開けようとすると鍵がかかっているので運転席側にまわり窓をコツコツたたくとようやく気がつき、あたふたと車をおりて後部座席のドアをあけてくれた。

体の調子が悪そうでもないし「何か問題でも起こったのか」と聞くと、彼は「アイム・ヴェリ・ヴェリ・アプセット・ナ」という。「ナ」はヒンディ語の語尾らしく、日本語の「～ですね」とか「～ですよ」といったニュアンスのようで、独学で身につけたらしい彼の英語は日常生活にはほとんど問題ないほどのレベルだが、なにを話しても最後に「ナ」がつく。おかげでこちらも同じリズムで話そうとするためか、「アンダスタンド・ね」とか「プリーズ・ゴー・ホーム・ね」と日本語の語尾「ね」がつくようになってしまっていた。

それはさておき、「なんでアプセット（心を乱す）なんだ」と聞くと、「インディア・ロスト・ナ」という。「ン、なんのことだ」と怪訝な顔を私がすると「テストマッチ・ナ」というから、「オー、クリケット・ね」と納得したところ、「イエス、イエス」と彼。

なんのことはない、クリケットの国際試合でインド代表チームがオーストラリアに負けたので、私が車に近づいたことに気がつかないという前代未聞の事態が生じたらしいのだ。心配損と思うなかれ。ことは彼にとってさほどに重大だったと理解すべきである。

実際、クリケット熱は庶民の間でとても高く、プロリーグ（Indian Premier League：ＩＰＬ）が開催される四～五月は、もうひとつの庶民の大きな娯楽である映画の新作封切りも少なくなる傾向にある。ただしＩＰＬの歴史はまだ浅く、クリケットの花形はなんといってもテストマッチと呼ばれる正式な国際試合であり、「今日は車のクラクションも少なくてずいぶん静かな午後だなあ」と思っていると、対パキスタン戦が開催されていた、ということもあった。みなテレビやラジオに釘付けだったのだ。

クリケットの醍醐味がどこにあるかと聞かれると簡潔に説明することは難しい。とにかく気の長いスポーツで、バッターはアウトになるまでフィールドに立ち続け、ティー・タイムやランチ・タイムを間に挟んだりしながら何日もかけて行われる。最近はＯＤＩ（One-Day International）やＴ20（Twenty 20）と呼ばれる一日ないし数時間で終わる試合形式が増えているものの（球数に制限を設けて試合を短く設定する形式）、テストマッチは一般に五日ほどかかる（二人一組でバッティングに立つ一一人のプレーヤーのうち一〇人がアウトになるまでが一イニングであり、両チームとも二イニングの攻撃を行う形式）。そして、このときの対オーストラリア戦

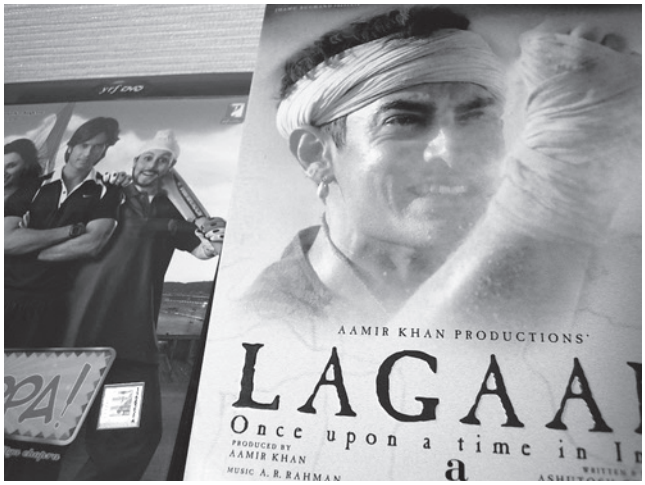
は、四テストマッチ・シリーズと呼ばれる形式で、基本的には五日かかるテストマッチを四回、一カ月ほどをかけて行っていた。二〇一一年四月にODI形式で行われたワールドカップで世界制覇したばかりのインドは、四テストマッチ・シリーズで七月に対イギリス戦で四戦全敗し、さらに対オーストラリア戦でもふたたび無残にも全敗し、「世界一のはずのインド代表チームはいったいどうなってしまったのだ」と国民総アプセットの状態に陥ったのであり、我が運転手も例外ではなかったということなのだ。

イギリスから伝わったスポーツはいくつもあろうに、なぜクリケットがかほどに人気を博すようになったのかはよくわからない。ラグビーやサッカーが普及するにはインドは暑すぎたとか、インドでは浄不浄の概念が生活の隅々まで浸透しており、体の接触の少ないクリケットが彼らの価値観とマッチしやすかったとか、理由については諸説ある。サッカーも人気があるという話だが、実際、道ばたで子供たちが興じているのは、ほとんど例外なくクリケットであった。

ただし、クリケットはやはり男性の娯楽という性格が強いように思う。女性も含めて庶民みなが楽しむ娯楽という意味では、インドではやはり映画が一番であろう。日本でも「ムトゥ・踊るマハラジャ」が一九九〇年代後半に大ヒットして以来、いまでは多くの方がインド映画がどのようなものか若干イメージできると思う。ただし、「ムトゥ」は南インドの映画であり、ムンバイ（旧ボンベイ）を中心に制作される通称「ボリウッド」映画がインドでは中心で、歌や踊りが入っているという意味での「ミュージカル形式」であることは南インドもボリウッドも基本的に同じであるが、ボリウッド映画はやはりずっと洗練された印象を与えると思う。

すでに紙面もつきたので、映画がどれほど庶民に愛されているかという体験について手短に語るため、我が運転手に今一度ご登場願おう。

インド人の友人に勧められてみたクリケットを主題とするボリウッド映画がある。タイトルは「ラガーン Lagaan」。「年貢」というような意味である。一九世紀末の英領インド時代のとある農村を舞台に設定した作品で、年貢に苦しむ農民たちがイギリス人支配者を相手に、見るのもはじめて、ましてやったこともないクリケットの試合を、勝てば年貢を免除、負ければ倍の年貢を納めると、いわば命を張って行うという筋書きである。二〇〇一年の大ヒット映画であり、米アカデミー賞（外国語映画賞）にもノミネートされたという。DVDを買ってきてみてみると、主人公が完全無欠すぎたり、プロットの性質上多少ナショナリスティックなきらいはあるものの、そのあたりはご愛敬、今に通じるインドの社会階層や宗教の多様さ、農村の風景などもほどよく織り込まれ、また例によって歌や踊りも華やかにあり、とてもよくできた映画であった。



筆者所蔵のクリケットを題材とする映画DVD（筆者撮影）

これを見た翌日、我が運転手に「ラガーン、ヴェリー・グッド・フィルム・ね」というと、私がそれをみたのがよほど嬉しかったのか、テレビで再放映されるたびに何度もラガーンをみたという彼は、この映画の冒頭のナレーションはボリウッド界の大御所俳優アミターブ・バッチャンが務めていると説明すると、バッチャンが出演した大ヒット映画を列挙し、さらには、バッグミラー越しに私がちゃんと聞いているか何度も確かめながら、おもむろにそのなかの名台詞をバッチャンの声色を真似て披露しはじめ、止まらなくなってしまったのだ。運転中のインド人に映画の話をしてはいけない、と学んだのはそのときだったように思う。

（さとう　はじめ／アジア経済研究所　南アジア研究グループ）